中部圏には、伝統と結びついた「あかり」と関連の深い豊かな文化が数多くあります。また、広範な光関連産業の発展のなかで、最先端の光に関する技術を利用した新しい様々な文化が育まれています。

調査季報「中部圏研究」では、こうした中部圏における「あかり」と関係の深い文化をシリーズで取り上げ、守っていきたい中部圏の文化、伝統文化と新しい文化の融合、新しい文化の動きなどについて、多面的に紹介していきたいと思います。

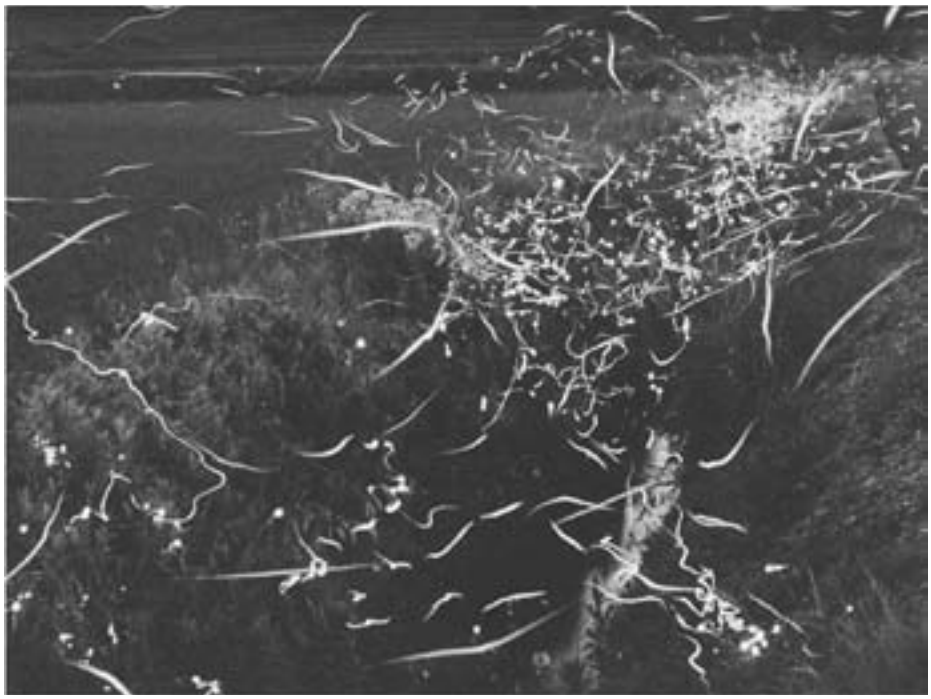
今号では「米原市のゲンジボタル」を紹介します。

米原市のゲンジボタル（滋賀県米原市）

ホタルが輝き、人が輝く。
“自然のひかり”を地域の宝として取り組むまちづくりの物語

㈶中部産業・地域活性化センター
客員研究員　坂口　香代子

中山道と北陸道の分岐点として栄え、古くから交通の要衝として知られる滋賀県米原（まいばら）市。ここはまた、日本百名山のひとつである伊吹山と鈴鹿山系に連なる霊仙山を擁し、その豊かな森林地帯に蓄えられた水が地域を流れ、近畿の水がめマザーレイク琵琶湖へと注がれる、水と緑に包まれた自然豊かなところ。そんなこの地の初夏の夜（よ）の風物詩「ゲンジボタルの舞い」が、今回の「あかりと文化」のテーマである。命の輝きとして放たれる“自然のひかり”を「地域の宝」として愛し続け、ホタルを核にしたまちづくりを進める人々の物語を紹介したい。



米原市のゲンジボタルの乱舞（写真提供：米原市）。

1.『米原市のゲンジボタル』とは

日本人の“自然美を愛でる文化”が今も息づく米原

かつては、全国で「夏の風物詩」として当たり前のように見られたホタルの乱舞。初夏の闇に明滅する、その幻想的な光は、ほんのわずかな期間しか見られないこととともあいまって、昔から日本人の心を魅了し続けてきた。

ホタルは古くは『日本書紀』に登場し、紫式部の『源氏物語』や清少納言の『枕草子』をはじめ、文学、詩歌、絵図、写真などの題材として数多く扱われ、その数は、数ある動植物の中でも群を抜いて多いと言われる。まさに日本人の自然美を愛(め)でるという文化を生み育んできた貴重な生物と言えるのではないだろうか。

しかし悲しいかな、すでにそんな夏の風物詩としての光景が日本各地で当たり前ではなくなって久しい中、滋賀県米原市は、大正時代からのホタルの保護活動の成果によって、今も多くのホタルが幻想的な舞いを見せる一大ホタル発生地となっているのである。

日本で唯一の特別天然記念物指定のホタル発生地

特に米原市の山東地区では、ホタルの中でもひときわ大きくかつ強く光る「ゲンジボタル」が多数飛び交い、「長岡のゲンジボタルおよびその発生地」（天野川※1）が国の特別天然記念物に指定されている。ホタル発生地として全国で天然記念物指定を受けているところは11カ所あるが、「天然記念物のうち世界的にまた国家的に価値が特に高いもの」として指定される「特別天然記念物」指定の地域は長岡のみ。米原市では他に近江地区の「息長(おきなが)ゲンジボタル発生地」が国の天然記念物に指定されている。

※1　指定区域：山東地区（旧坂田郡山東町）を流れる天野川が弥高川と合流する地点の上流91mから下流1,091mまでの河川敷および堤防敷。

天野川（米原市・山東地区）を飛び交うホタル（米原市提供）。

ホタルの中でひときわ大きく強く光る「ゲンジボタル」。米原市には、このゲンジボタルの他、ヘイケボタル、クロマドボタル、ヒメボタルの４種がいる。（田中氏提供）

１月中旬の「長岡のゲンジボタルおよびその発生地」（天野川）風景。向うに見えるのは伊吹山。ゲンジボタルの幼虫がカワニナをモリモリ食べ、６～７回の脱皮を繰り返しながら大きくなる水中生活を送っているころ。

ホタルとの共存共栄を誇りに「天の川ほたるまつり」を開催

また、米原市では、「ホタルが輝き　笑顔あふれる田舎都市　まいばら」として、ホタルを市のシンボルと位置づけ、市民やボランティアなどとの協働により、発生数調査やパトロールなどの保護活動の他、毎年、ホタルの自然発生時期（６月ごろ）に合わせて「天の川ほたるまつり」やホタルパレードを開催。毎年、２万人を超える人出を数えている。このまつりの特徴は、一つには「住民参加型の運営」である点、もう一つは、単に、ホタルを観光資源として活用するのではなく、自然環境のバロメーターとして貴重な役割を果たしているホタルを「環境啓発のシンボル」ととらえ、ホタルがいる光景の素晴らしさを祭りを通じて多くの人に伝えることを目的としている点である。

「天の川ほたるまつり」で我々が見ることができるホタルは、養殖されたものではなく、すべて天然のホタル。会場は、市民の暮らしが普通に営まれている場所である。日本の他地域でもほたるまつりやホタル観賞会は開催されているが、そのほとんどは観賞用施設や養殖施設を会場にしたもので、米原市の取り組みは非常に珍しい。自然のままであるがゆえに、開催時期は毎年一定ではなく、その年の発生状況を調査した上で慎重に決められる。

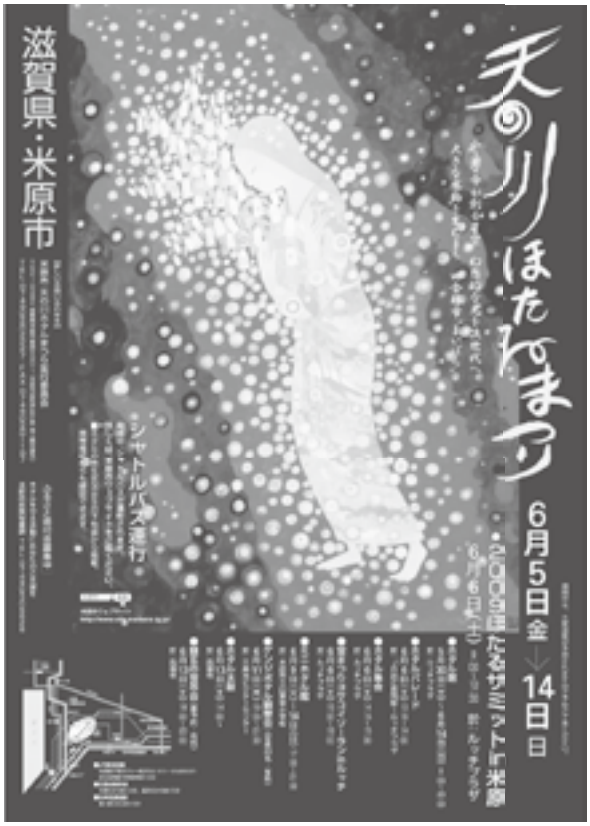
つまり、米原市では、“ホタルが自然発生する環境”を「地域の宝」として守り育てる中で、ほたるまつりを開催しているのである。住民参加型の運営も、その趣旨から生まれたものである。

これらは、実は、米原市が市としての産声を上げる前から旧山東町で行われてきた「まちづくり」への取り組みがその根幹にある。まずは、その発端となった長岡（天野川）のゲンジボタル保護の85年に及ぶ歴史を振り返る。

２．長岡（天野川）のゲンジボタル保護の歴史

鴨と蛍の里・山東

米原市は、滋賀県東北部地域の中心に位置し、中山道と北国街道が通り、古くから近畿・東海・北陸を結ぶ交通の要衝として機能してきた地域である。滋賀県唯一の新幹線駅も、ここ米原にある。



2009年に開催された「第26回天の川ほたるまつり」ポスター

また、隣接する長浜市、彦根市、そして岐阜県関ヶ原町とともに、歴史の表舞台にも度々登場し、現在も数多くの史跡が残されている歴史ロマン漂う場所でもある。

そんな米原市だが、「市」としての歴史はまだ浅い。いわゆる平成の大合併により、2005年２月14日、まず滋賀県坂田郡の山東町、伊吹町、米原町の３つの町が合併して誕生。さらにその年の10月１日に坂田郡近江町が加わり、結果的には旧坂田郡が１つとなる形で、現在の米原市が形成されたのである。

旧坂田郡の各町は、それぞれ変化に富んだ豊かな自然や文化を有しており（コラム「“田舎都市”米原市を形成する各地の特徴」参照）、その中で、「鴨と蛍の里」として昔から知られていたのが、旧山東町地域である。

山東地区を流れる天野川は、伊吹山と霊仙山という、ともに石灰岩質の山地が源流で、カルシウム質の水量豊富な清流であることからゲンジホタルの幼虫の餌となる巻貝の一種「カワニナ」の生育に適している。かつて、ゲンジボタルの発生最盛期は、川面がその乱舞で明るくなるほどだったという。さらに天野川という名前も、ホタルが乱舞する幻想的な光景が七夕の天の川を想像させることから名付けられたと言われている。

大正時代に始まった「ホタル番」

そんな旧山東町の長岡で、ゲンジボタルの保護活動が始まったのは1926年（大正15年）。長岡が一大発生地であることが広まり、販売目的での捕獲が頻発し、ホタルの数が激減。このままではいけないとホタルを守る気運が高まったことがそのきっかけだった。地元長岡の青年団を中心に、他所からホタルを採りに来る人を見張る「ホタル番」が組織されたのである。その後、「長岡保勝会」が生まれ、ホタル保護活動は区民の中に広がっていった。一方、昭和天皇の第一皇女の誕生を記念して、皇居へのホタルの献上が行われた。1926年に始まったホタル番の精神は、80年を越える時代を経ても受け継がれており、現在は、「天の川ほたるまつり」期間中、来場者にホタル観賞のマナーやホタル保護の案内を行う「ホタルパトロール」という形で行われている。

唯一の「特別天然記念物」指定とほたるまつりの開催

そんな保護活動が実を結び、1944年（昭和19年）には、まず、国の天然記念物に指定。第二次世界大戦の激化の中では、逆に「ゲンジボタルの光の帯が敵機来襲の目標になるのでは」という心配が生まれるほどの発生をみたという。

その後、1952年（昭和27年）、「長岡のゲンジボタルおよびその発生地」は、天然記念物よりさらに価値が高いものとして、「特別天然記念物」の指定を受けたのである。

またこの頃から、現在のほたるまつりとは違う

山東地区にあるマガモ自然繁殖の南限地（県の天然記念物）「三島池」から望む伊吹山。この周辺にもゲンジボタルの発生ポイントがある。

1926年（大正15年）に始まった、当時の山東町長岡区の青年団によるホタル番の面々。（田中氏提供）

が、ホタル保護と観光の両面からほたるまつりが開催されるようになったのである。

昭和30年代、一転、ホタル絶滅寸前の危機に

ただ、危機は襲ってきた。しかもそれは最大のピンチだった。昭和30年代になって、農薬や生活排水の影響でカワニナが減少し、それに伴って、ホタルの幼虫も減少。そこに追い打ちをかけるように襲来したのが1959年（昭和34年）の伊勢湾台風。天野川が氾濫し、ホタルの生息地は根こそぎ洗い流されたのである。さらに問題はここからだった。天野川の根本的改修が行われた結果、護岸や川床が大きく変わってしまい、ゲンジボタルは生息場所を失い、一時、絶滅の危機に瀕したのである。

当時、高度経済成長をまっしぐらに歩んでいた日本。農薬や家庭排水などによる水質悪化や水源の減少などによってゲンジボタルが絶滅した例は少なくなく、滋賀県のホタル発生地としていち早く天然記念物に指定され、保護活動の取り組みも長岡同様早かった守山市（1926年指定）では、1960年（昭和35年）に指定解除となっていた。

まちぐるみの地道な保護活動によりゲンジボタル発生地として復活

長岡は、守山市と同じ道は辿らなかった。1965年（昭和39年）「天野川源氏蛍を守る会」が発足した。さらに山東東小学校にホタルクラブが生まれ、ホタルの一生を観察し、飼育にも成功。それぞれは小さな組織だが、自治体、民間、教育の現場とまちぐるみでの地道な保護活動を行った結果、1966年（昭和41年）には７年ぶりにほたるまつりが開催されるまでに長岡のゲンジボタルは復活したのである。

その後、1972年には、ホタルを守ることは地域を守ることであるということから「山東町蛍保護条例」を制定、1997年に改正され、草刈り期間の制約、農薬使用と野焼きの規制、ホタルの餌のカワニナの保護と幼虫の保護など、旧山東町全域でのホタル保護活動へと発展。さらに、継続的にホタルを保護していくためには、地域環境の調査研究も重要であるとして、1989年（平成元年）には住民有志によって「鴨と蛍の里づくりグループ」が結成された。調査研究はもとより、町や県への助言・提言活動も積極的に行われ、このグループ

昭和天皇へのホタル献上の出立風景（旧長岡駅前、1950年6月9日）（田中氏提供）

昭和初期に行われていたほたるまつりのポスター（栗東歴史民俗博物館提供）

長岡神社前の天野川で出番を待つホタルみこし（昭和30年代前半）（田中氏提供）

による調査研究の成果が、現在の米原市のホタル保護活動に大いに生かされている。

大正時代、まず長岡という限定区域で始まった住民主導のホタル保護活動が、旧山東町全域へと広がり、米原市として合併後は、2007年に「米原市蛍保護条例」を制定し、さらに市内全域を蛍保護区域とする選択へと結びついている。

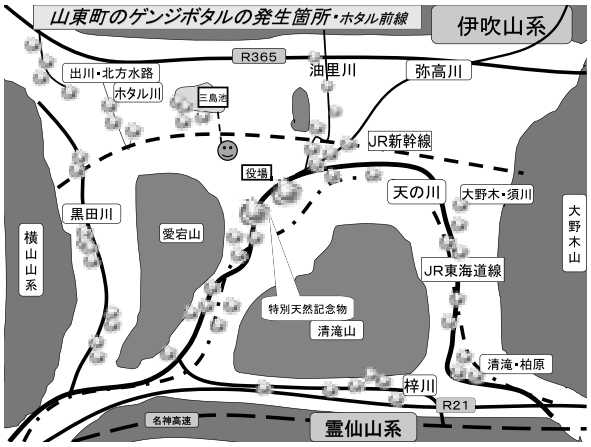
「これは、ホタルの保護活動を通じて旧山東町の住民たちの中に芽生え取り組んだ“ホタルを核とするまちづくり”のひとつの成果だと思っています」。そう語るのは、自身がホタルを核とするまちづくりや住民参加型の「天の川ほたるまつり」の運営に長年かかわってきた天の川ホタルまつり実行委員会運営委員長の田中眞示さん。田中さんたちの活動を中心に、山東町でスタートした地域の宝であるホタルを核としたまちづくりの取り組みを紹介する。

3．ほたるまつりにみるまちづくり

行政主体から住民参加型へ

今年27回を迎える米原市の「天の川ほたるまつり」は、1985年（昭和60年）に旧山東町において行政主体でスタートしたものだが、1996年（平成８年）、住民参加型のまつりへと展開されている。

これは、山東町総合計画で町の将来の姿として表した「水やさしく　光まうまち　美しい山東・ひと・まち・くらし」のもと目標とした「町民と行政が情報を共有」「住民の声を町政に反映」「望ましいパートナーシップのもとに役割分担」「協働・協創のまちづくり」の４つをほたるまつりにも反映しようということである。



山東町の源氏ボタルの発生箇所（ホタル前線）

最近のゲンジボタル発生状況

年	幼虫上陸初認日	成虫発生初認日	上陸初認日から発生初認日までの日数	最盛期	春先の気温
1995	４月９日	５月28日	50日		普　　通
1996	４月15日	６月１日	48日		寒　　い
1997	４月２日	５月16日	45日		暖　か　い
1998	３月27日	５月７日	42日	５/19～６/６	大変暖かい
1999	３月26日	５月15日	51日	６/３～６/12	暖　か　い
2000	４月10日	５月23日	44日	６/３～６/14	普　　通
2001	４月５日	５月24日	50日	５/31～６/10	普　　通
2002	３月28日	５月13日	57日	５/28～６/10	５月低温
2003	４月２日	５月18日	47日	５/28～６/13	暖　か　い
2004	３月30日	５月17日	47日	５/28～６/７	大変暖かい
2005	４月２日	５月20日	49日	６/５～６/20	やや低い
2006	４月４日	５月28日	55日	６/９～６/20	普　　通
2007	４月６日	５月21日	46日	６/４～６/20	暖　か　い
平均	４月３日	５月20日	49日	６/２～６/13	

（米原市提供）

「先人たちが守り育ててくれた自然と環境を次の世代に引き継いでいく。ホタルは自然と人とが共生するためのバロメーター」だとして、行政だけでなく、住民みんなが参加できるまつりにし、知恵を出し合い、地球環境保全と美化を訴えていこうということで、手作りで開催するイベントとして再スタートを切ったのである。

最大のポイントは“自然発生のホタル”を見てもらうこと

住民参加型ほたるまつりのポイントは大きく3つ。

まず、来場者に必ず自然発生のホタルを見てもらうこと。「天の川ほたるまつり」は、自然が相手のため、開催時期は、毎年一定ではない。ホタルまつり実行委員会は、「鴨と蛍の里づくりグループ」などの協力を得て、その年のホタルの幼虫の上陸状況を調査し、開催時期を決定するのである。

面白いのは、山東には、田中さんたちが名付けた「ホタル前線」という言葉があり、気温と水温の関係から、ホタルの発生箇所は西から右回りに移動していくという。ぐるっとひとまわりするのに、約１カ月。ほたるまつりはその中で最も見ごろの時期になるよう調整され実施される。

子供たちを含めた住民参加の輪を広げる

２つめに、未来を託す子供たちを含め、住民の参加の輪を広げる取り組みを積極的に行っていること。例えば、ホタル観賞をよりしやすくするために、街灯などの人工照明を消し、山東（サントウ）にちなんで手作り行灯310個を設置。これにあたっては町内４小学校の生徒に協力を要請し、行灯絵図を描いてもらい、その家族の参加も促した。また手作り行灯の支援者を地域を越えて募集し、ほたるまつりへの参画意識と環境保護意識拡大を図ったのである。

街灯を消し、手作り行灯で来場者を観察会場へ案内
（米原市提供）

コラム
【“田舎都市”米原市を形成する各地の特徴】

[山東地区（旧山東町）]

姉川や天野川などの水に恵まれ、昔から鴨と蛍の里として知られてきたところ。国の特別天然記念物「長岡のゲンジボタルおよびその発生地」があり、「天の川ほたるまつり」の主開催場所。

[伊吹地区（旧伊吹町）]

日本百名山の一つであり、滋賀県最高峰・伊吹山の山麓に広がるまち。伊吹山頂には美しい「お花畑」が広がり、1250種類もの草花が生育する。伊吹山で1927年（昭和２年）に観測された11.82mの積雪は、世界山岳気象観測史上１位とされる積雪の世界記録。

[米原地区（旧米原町）]

東に霊仙山を望み、西は日本一の湖・琵琶湖に面する地域。古くから近畿・東海・北陸を結ぶ交通の要衝、中山道や北国街道の宿場町として栄え、昔のたたずまいを今に残している。また、豊富な湧き水を誇る水の郷としても知られ、醒井の居醒の清水にはヤマトタケルノミコト伝説も残る。

[近江地区（旧近江町）]

古代豪族息長氏の繁栄や、賢夫人として全国的に有名な山内一豊の妻千代の出生地として数々の歴史が残る。また、国の天然記念物「息長ゲンジボタル発生地」がある。

行灯つけは、住民とボランティアの協働で実施（米原市提供）

米原市シンボルキャラクター。
左から「姫ママル」「ホタルン」「源氏パパル」

自分たちの言葉で自然保護の大切さを発信

そして３つめが、住民が参加し案内なども行う中で、来場者と触れ合い、水環境や自然保護の大切さを自分たちの言葉で発信していくことである。

P・D・C・Aのサイクルでまつり運営のレベルを向上

1996年に始まった住民参加型のほたるまつりは、当初は、不慣れな運営の中で、交通渋滞の発生やごみ問題、ホタルの大量の死骸が翌朝発見されるなど、問題も多かったが、終了後の反省会をもとに改善すべき点や役割を明確にし、「P（計画）」「D（実施）」「C（検討）」「A（処置）」のサイクルを毎年回すことを心がけたこと、また後で紹介する「ルッチ大学」の開校によりまちづくりリーダーの育成がはかられたことで、年を追うごとに運営レベルが向上し、多くの人の協力も得られるようになっていった。

田中さんは、「天の川ほたるまつり」を「四輪駆動のまつり」だと表現する。「地道な研究活動を続けてくれる研究者、延べ3,000人を超える住民ボランティア、住民参加型活動に熱い思いを込めた事務局（行政）、祭りの運営を前向きに見つめてきた運営委員会の４者の程良いバランスが、「天の川ほたるまつり」を育ててきたというのである。そして、こうしたまつりへの取り組みこそが、旧山東町ではまちづくりの核となり、米原市として合併したあとは、新たな展開を始めている。

４.「米原市」に受け継がれたホタルを核にしたまちづくり

「田舎都市」を宣言し、そのシンボルを「ホタル」に

米原市では、2008年（平成20年）には、「ホタルは豊かな自然環境の証であり、ホタルの光は命の輝き、そしてぬくもりである。私たちの願い『ホタルのように小さな輝きが集まって大きな感動を生むまち』をめざし、米原市のシンボルを「ホタル」にする」と定め、「米原市環境基本計画」の中で、新市のめざすべき姿（環境像）を「ホタルが輝き　笑顔あふれる田舎都市　まいばら」と設定している。

このシンボル設定への動きは、実は、市民の声から生まれている。新市誕生後、市の総合計画を策定するにあたって市民にアンケートを実施したところ、「市のシンボルを定めたい」という声が多数寄せられた。そこで、新市のイメージアップ戦略と市民の一体化を図る目的で、シンボル案を市民から公募したところ、「ホタル」を推す声が圧倒的に多く、米原市のシンボルをホタルにすることが決まったのである。

これは、長岡区住民による80年以上にわたる地道なホタル保護活動の成果であるとともに、「近

年、旧山東町で特に積極的に進めてきた『ホタルを核としたまちづくり』への取り組みが周辺地域へうまく波及していたのだろう」と田中さんは語る。

旧山東町では、ほたるまつりの他に、実はもう一つ、非常に面白い試みが2001年から行われていたのである。

まちづくりリーダーを育成する「ルッチ大学」の挑戦

2001年10月に開校した「ルッチ大学」がそれだ。「ルッチ」とはイタリア語でホタルを意味する「ルッチオーレ」の略。旧山東町は、同年４月に「保健福祉サービス、文化活動及び生涯学習の機能をもつとともに、住民主体によるコミュニティ、まちづくりの気運を高める交流の場となる施設」として、地域の宝であるホタルが羽を広げた様子をかたどった複合施設「ルッチプラザ」を建設。ルッチ大学は、ルッチプラザを拠点にまちづくりを学ぶ市民カレッジである。合併前は旧山東町の事業として、合併後は米原市の事業として継続して実施されており、学長を米原市長が務め、現在は５期生が学んでいる。

【ルッチ大学の特徴①】個人の学習成果をまちづくりに生かす

市民カレッジというと、単年度形式のカルチャースクール的な講座を開催する例が多いが、ルッチ大学は、それとは一線を画している。「個人の学習成果をまちづくりに生かそう」をコンセプトに、力強く行動ができる人財の育成（＝「まちづくりリーダーの育成」）を目的としていることが大きな特徴である。

２年間36講義を通じて、「ひとづくり講座」・「まちづくり講座」・「風土を学ぶ講座」の３つの学習群から、講義やフィールドワークのほか、グループワークによる事例研究活動等を通じて、現代的課題をはじめ、まちづくりの手法やノウハウ等を学び、今後の地域づくりの実践につなげていこうというものである。大学は２年制で、さらに２年

ルッチ大学の拠点「ルッチプラザ」。保健・福祉センター、コミュニティホール、図書館からなる複合施設である。合併後は「米原市民交流プラザ（ルッチプラザ）」として運営されている。ホタルをイメージした外観が特徴。２つの羽部分の棟の間の階段が夜になると光る。

ルッチ大学の概要

学習過程

◆２年制
（現在５期生受講中：2009.10 ～ 2011.9）

◆２年間の大学院あり

履修内容

（本文参照）

講義数と単位認定

◆基本：36単位（１講義＝１単位）

◆卒業資格：総授業数の８割以上の習得

運営方法

◆開校日：原則として毎週第２・第４火曜日
19：30 ～ 21：30

◆開設場所：基本は「ルッチプラザ」

入学資格

◆18歳以上でまちづくりに関心・興味があり、継続して学習できる人

授業料

◆１年につき１万円

◆現地研修、講座にかかる経費や旅費などは実費負担

間の大学院が設置されている。

【ルッチ大学の特徴②】
全国からまちづくりの仕掛け人を招へいし、そのバイタリティを感じる

最初の１年間は、座学が中心であるが、その座学も、まちづくりの基礎学習だけでなく、自分たちの住むまちを再認識し、まちの課題や宝ものを探る学習も行う。さらに、各地の地域改革の仕掛け人に講師を依頼し、その取り組み事例を学ぶとともに、彼らのバイタリティを肌で感じ、まちづくりへのモチベーションを高めるカリキュラムも組み込まれている。

【ルッチ大学の特徴③】
グループごとに事例研究を行い
卒業レポートを提出

２年目からはグループ学習という形態で、グループごとにまちづくりに関する具体的な事例研究テーマを設定する。グループ員が協力し合ってテーマに沿った調査･研究活動を行い､卒業レポートにまとめる。レポートは卒業時に発表し、今後のまちづくりへの提言という意味も含め、市に提出する。

【ルッチ大学の特徴④】
入学資格に地域限定なし

ルッチ大学のシステムがもう一つ画期的なのは、地方自治体の事業として行っているにもかかわらず、入学資格は「18歳以上で、まちづくりに関心・興味があり、継続して学習ができる人」ということのみで、地域の縛りが一切ない点。彦根市、長浜市などから学びに来る人も珍しくなく、もちろん、合併前の山東町時代は米原町など合併前の他の坂田郡からの学生もいた。広く開かれたこのまちづくりへの学びのシステムが、米原市となった今、非常に大きく機能している。

日本各地からまちづくりの仕掛け人を講師に招く他、実際に現地に出向き、その成功事例を学ぶ。

２年次は、グループに分かれ、それぞれ具体的な事例研究を行う。

【ルッチ大学の特徴⑤】
まちづくりの各方面で「ルッチ学士」が活躍

学生の年齢は幅広く、現在の５期生は20代～70代で、平均年齢は53歳。一期あたりの定員は40人。これまでに､108人がここから巣立っていった。

修了生には「ルッチ学士」の称号が授与され、学習した成果を地域で生かせるよう、各種委員会などへの参画など自治体のバックアップもある。卒業生は実際に、行財政改革市民会議や環境パートナーシップ会議､地域創造会議などの住民代表、他市町村で開催される「まちづくりフォーラム」のパネラーやルッチ大学の講師などとして活躍。ルッチ大学の一期生でもある田中さんは、米原市が2006年に策定した「米原市自治基本条例」の制定推進員会市民メンバーとしても参加している。

このようなルッチ大学の取り組みが、この地域の人々のまちへの思いを高め、今、「地域の宝」

「地域の資源」に着目したさまざまなまちづくりの芽が育ち花が開かれている形だ。「ほたるまつりによるまちづくり」もその一つで、先に紹介した地域住民によるまつりの運営のレベルアップに大きく貢献している。

５.「天の川ほたるまつり」の今

では、このような経緯の中で、現在開催されている「天の川ほたるまつり」の楽しみ方のポイントを紹介したい。

2,000種中、わずか３種しかいない「水生ホタル」の命の輝きを見る

ホタルは、世界でおよそ2,000種が生育しており、日本では本州以南に約46種がいると言われている。米原市には､そのうち「ゲンジボタル」「ヘイケボタル」「クロマドボタル」「ヒメボタル」の４種が生育している。

実は、意外に知られていないが、世界に2,000種もいるホタルのうち､「水生ホタル」と言われる水辺で生活するホタルはゲンジボタル、ヘイケボタル､そしてクロマドボタルの３種だけである。しかも、夕闇の中でその命の輝きともいえる幻想的な光を放つ夜行性のホタルはゲンジボタルとヘイケボタルのみ。

さらに､「飛ぶホタル」は、雄だけである。雌は草むらに潜んでいることが多い。ホタルが発光するのは求愛行動のためで、雄は空間を乱舞しながら一斉に光を放ったり消したりして、一斉に明滅しない雌を探すのだ。

特に、米原市は、ホタルとしては日本最大で、

幻想的な光の帯が見る人の心をとらえるゲンジボタルの乱舞

米原市に生育するホタルの特徴

ゲンジボタル（源氏蛍）

［成虫の体長］　12～18㎜（雌が大きい）
［発生時期］　５月下旬～６月
［成虫の寿命］　数日～10日（雄の方が短い）
［その他特徴］　前胸に十字形の黒紋。ヘイケボタルよりも大きく（日本最大)､放つ光も大きい。幼虫は主に少し汚れた川に生息し、水中でカワニナ（巻貝）などを食べて成虫になる。

ヘイケボタル（平家蛍）

［成虫の体長］　７～10㎜（雌が大きい）
［発生時期］　６月～８月
［その他特徴］　前胸に太い縦筋の黒紋。主に川沿いの湿気の多い水田に生息。幼虫は水中でモノアラ貝やサカマキ貝（巻貝）などを食べて成虫になる。

クロマドボタル

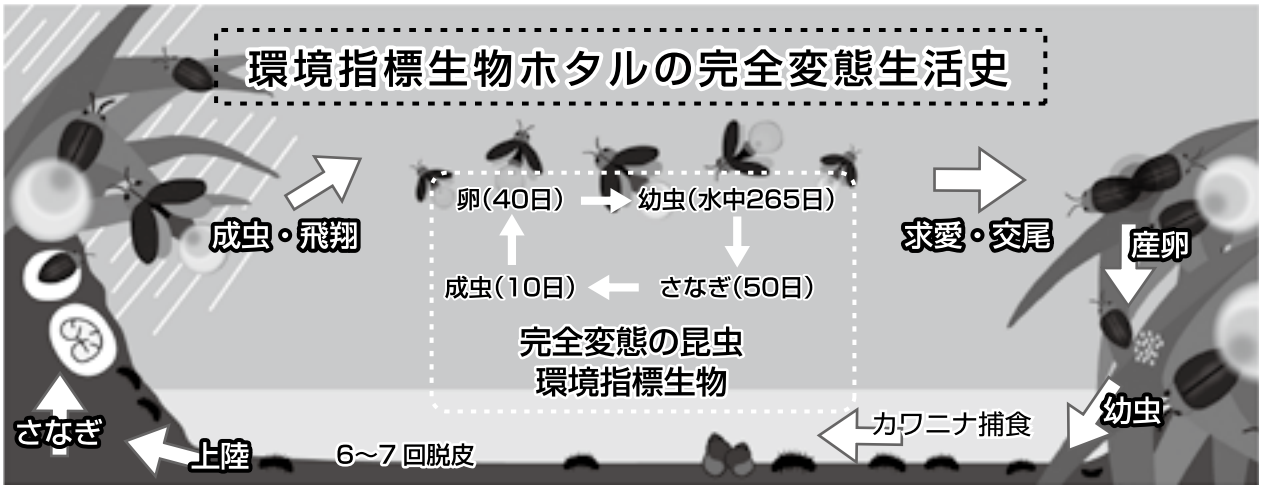
［成虫の体長］　11～20㎜（雌が大きい）
［発生時期］　６月下旬～６月上旬
［その他特徴］　前胸に左右２つの透明な窓があり、その下に黒色の小さな目。成虫は幼虫の数に対して目視できる数が極端に少ない。幼虫は主に陸の貝類を食べて成虫になる。

ヒメボタル

［成虫の体長］　６～９㎜
［発生時期］　７月～８月
［その他特徴］　前胸の黒紋は前縁中央にあり半円形をしたものが多く、後縁に達しない。目は大きく、頭部は目の間でややくぼむ。発光は短い間隔でフラッシュをたいているよう。幼虫は陸上でカタツムリの仲間を食べて成虫になる。米原市では伊吹山に多く生息している。

（参考資料：「米原市のホタル」）

ゲンジボタルの一生



放つ光がもっとも強い「ゲンジボタル」の一大発生地であり、フラッシュ的な光の点滅ではなく、長く伸びる光の帯を観賞することができる。

「天の川ほたるまつり」は、そういった点から考えると、実に貴重な「自然のひかり」を見ることができるまつりなのである。

ほたるまつり開催場所は、主に旧山東町全域

「山東ほたるまつり」をもととする「天の川ほたるまつり」は、旧山東町のホタル発生ポイントで開催される。

開催時期は、主に５月下旬～６月上旬。ただし先にも紹介したように､｢天の川ほたるまつり｣は、まちの人々が守る「環境の結晶であるホタル」を観賞するまつりであるため、開催時期はその年のホタルの生育状況次第。ホタルの発生は、気温や気象条件にも大きく左右されるため、実行委員会では、「鴨と蛍の里づくりグループ」のホタル研究部の協力を得て､気象条件にも気を配りながら、発生時期を絞り込む｡これまでホタル研究部では、ゲンジボタルの幼虫の上陸と成虫発生との関係を定点調査してきており（資料「ゲンジボタルの一生」参照)、それをもとに発生ポイント数カ所でその年の幼虫の上陸状況を調べ、実行委員会にアドバイスしている。

特別天然記念物「長岡のゲンジボタルおよびその発生地（天野川）に建つ石碑

米原市メール配信サービスでホタルの最新情報を提供

毎年、このまつりを楽しみにしているリピーターも多く、主に関西圏や中部圏から多くの人が訪れている。2009年の第26回天の川ほたるまつりでは、臨時駐車場に札幌ナンバーや山口ナンバーの車も見られたという。

このような中で、米原市には毎年、春の訪れとともに、各地から「ホタルのお問い合わせ」が寄せられる。その数は、１シーズンで数千件、ピーク時には１日200件を超える。そういった問い合わせにできれば具体的に答えたいが、発生場所やそのアクセス、発生数の推移などを電話で詳しく伝えることは難しい。このため市と観光協会のウェブサイトで米原市のホタルの最新情報を提供している他、メール配信システムに登録すると、

期間中、ホタル確認情報の配信を受けられるサービスも実施している。

新たに住民たちによってつくられた手作り行灯が道案内

ゲンジボタルが光るのは、夜の８時ごろから。５月上旬になると、住民のボランティアによって、ほたるまつりの準備が始まる。長岡区では、AMO（近江長岡駅周辺地域活性化懇話会）と協力し、道の道標となる行灯の取り付けや、車の交通量が多い大きな道路のそばでは、車の光があたらないように遮光幕の取り付けも行われる。まつり開催期間中は街路灯の光を消す取り組みも行われている。

ホタルまつり実行委員会では、ホタル案内マップや案内所を、米原市役所山東庁舎前に設置し、できるかぎり公共交通機関での来場を促すために、混雑する土日には、「レール＆ライド・パーク＆ライド」を実施。JR近江長岡駅や伊吹パーキングエリアなど乗換場所として、シャトルバスが運行されている。

ホタルの観賞には、他のあかりは邪魔になるが、夕闇の中での安全性も考慮し、風情を誘う行灯で道案内を行う。（米原市提供）

市内の子供たちが描いた絵を行灯に貼り付ける。（AMO）

米原市の子供たちによる「ホタルパレード」風景。

ホタルパレードや企画展を開催

ほたるまつり開催時期の土日には、米原市内でさまざまな催しも行われる。

ボランティアによる手作り行灯の取り付け風景。（AMO）

これまでのホタル保護活動の様子を伝える企画展示風景。こちらも住民たちの手作りイベントである。（AMO）

保育園・幼稚園児によるホタル太鼓披露風景。ホタルを地域の宝とする取り組みが子供たちへ継承されていく。

山東東小学校では、「ホタルパレード」と「ミニホタル館」を開催。児童の手作り御輿や鼓笛隊によるパレードには、保育園や幼稚園児も参加し、市内を行進。

ルッチプラザでは「ホタル集会」が開催される。長岡保育園・山東幼稚園児によるホタル太鼓の披露、また山東東小学校で日頃から行われているホタルの飼育観察の記録や環境を中心とした総合学習「ほたるっ子タイム」の成果の発表などが行われる。

ゲンジボタル発生場所の一つ「蛍の川」。

夕闇に光るホタルは「まちを愛する人々の物語の結晶」

天の川ほたるまつり実行委員会事務局は、米原市商工観光課に置かれているが、その準備や運営の多くは、住民ボランティアによるもの。夕闇に幻想的な光を放ちながら舞うホタルの群舞は、まさに、「まちを愛する人々の物語の結晶」でもある。

それゆえ、ほたるまつりの開催によって、その環境が脅かされることがあっては本末転倒である。ホタル観賞のマナーとして、「ホタルをつかまえないこと」の他に、「夜間であり、静かに観賞すること」「足元にも気をつけて、ホタルを踏まないようにすること」「カメラのフラッシュなど不要な明りは消すこと」「ゴミは各自で持ち帰ること」などを来場者に案内しているが、それらをできる限り徹底させるために、大正時代の「ホタル番」から続く住民ボランティアによるホタルパトロール隊が活躍している。

６.「ホタル」を核にした米原市のこれから

インタビュー

木田さん（左）
田中眞示さん（天の川ホタルまつり実行委員会 運営委員長､中央）
梅本　匠さん（米原市役所 経済環境部商工観光課、右）

米原市全域に広げた
ホタル保護の気運を高めたい

―旧山東町で取り組まれてきた「ホタルを核としたまちづくり」は、米原市の誕生後、どのような形で継承されているのでしょうか。

木田　私が所属する環境保全課が蛍保護条例の取り組みを行っています。非常に大きなことだと思うのは､2007年に「米原市蛍保護条例」を制定し、合併前の「山東町蛍保護条例」によるホタル保護の取り組みを米原市全域に広げたことだと思っています。現在の「天の川ほたるまつり」は旧山東町地域で行っていますが、近い将来、米原市の各地域でホタルまつりが開催できる日が来てほしいと考えています。

「ニナプロジェクト」始動

―課題はどのようなことだとお考えですか？

田中　木田さんが言われたように、せっかく米原市としてゲンジボタルの保護をやっていこうといいうことを決めたのですから、その気運を実際に米原市にどう広げていくのか、それがこれからの一番の課題だと思っています。そのためには、まず、シンボルキャラクターをうまく活用し、今後さらにホタルを市民の身近な存在となるよう取り組む必要があると思います。

もう一つは、自然と人間の共生を時代に合わせてどう取り組んでいくのかです。今のままの自然をとにかく守るということだけでは､これから先、立ち行かなくなる時が来るでしょうから。

実は、ホタル50匹が生きるためには、その餌であるカワニナは1,000匹以上が必要です。ゲンジボタルの生態系は食べ物、天敵などの生物学的要因と水質、底質、水辺の地形など無生物的要因のバランスによって決められるもので、こうした生態系全体を配慮しなければいけません。

そこで、今年から取り組むのが､「ニナプロジェクト」です。保護区域としてホタル保護のソフト面は整備されましたが、ルッチ大学生の調査研究ではホタルの幼虫が育つ環境は崩れていると予測される結果が出ています。そこで、餌となるカワニナを増殖させ河川に供給することを目的として「ニナプロジェクト・ホタルン」を立ち上げたわけです。これは、ルッチ大学一期生の「環境グループ」の研究テーマ「山東町の水環境のこれから」で取り組んだ問題点の改善活動を、2008年に立ち上げた「AMO（Activation Meeting of Omi Nagaoka Station area：近江長岡駅周辺地域活性化懇話会)」に引き継ぎ、AMOで地域の活性化のための主体事業として展開していくものです。

今年の10月には、名古屋で「COP10」（生物多様性条約第10回締約国会議）が開催されます。生物多様性の諸問題に対しては、これまでの行政主体の事業展開ではなく、地域住民の進んだ保全活動の取組みが始まり、これを企業が支援するような時代が来ていると思います。

事例を紹介すると、私が42年間勤めた関西電力では毎年６月を「環境月間」と定めて全社で環境に関した行事を展開しています。ほたるまつりの時期がちょうどその６月の環境月間に重なることから、約20年に渡り影からの支援でホタル保護活動を支えていただきました。

短期の支援企業もありましたが、今後は環境問

題に対して地域の活動に対する継続した支援を行う企業は多くなってくるのではないでしょうか。きっと、企業のイメージアップにもなると思います。関西電力では、「ニナプロジェクト・ホタルン」の取組みに対しての支援も検討していただいていますし、他にも支援を検討していただいている企業もあります。

やはり、環境問題に対しての地域の熱意・活動を行政・企業が支えていくという方向に変わっていくことが大切だと思います。

「天然記念物」とは、その地域の活動があってこそ成り立つもの

田中 「天然記念物」あるいは「特別天然記念物」は、絶滅を危惧されている動植物と同義ととられがちですが、実は単に生物種のみを指しているのではなく、動物の場合は生息地、繁殖地、渡来地を、植物の場合は自生地を含めての指定です。もちろん生物種そのものの保護は重要な事ですが、天然記念物の制度はそういった動植物の保護を第一に考えたものではなく、その生息地の保護なのです。これには、その地域が地域ぐるみで非常に地道な作業を継続的に取り組んでいくことが何より必要で、今、私たちの孫世代が、ホタルが飛び交う季節を心待ちにし、ほたるまつりを心から楽しんでいる様子を見ていると「実は、この取り組みこそが地域の宝だ」と思うのです。行政と市民が協力して、なんとしても続けていかなければいけないと思います。

天野川に建てられた「特別記念物指定地域」を示す石碑の一面には、ホタルを追いかける子供たちの絵が描かれている。ホタルを「地域の宝」として愛し続けてきた地域の願いが込められている。

「地域の宝」としてホタルを愛してきた歴史を次の世代にも

梅本 私は、田中さんや木田さんと違い、実はお隣の長浜市市民（笑）。しかもまだ米原市の職員としての歴史も浅いので、自分の思いというより、天の川ホタルまつり実行委員会の事務局の人間として、米原市、特に旧山東地域の皆さんの思いを肌で感じる中での意見としてお話すると、今も「大正14年から昭和25年まで、天皇、皇后両陛下に長岡のゲンジボタルを献上してきた」と誇りを持ってお話される方がいます。ここには、住民が「地域の宝」としてホタルを愛し続けてきた歴史がしっかりとある。その歴史を次の世代に引き継ぐことが、今、米原市にとって非常に大きなことだと考えています。米原という地方は、まだまだ自然も残っており、名古屋圏や京阪神圏のどちらにも近く、エコツーリズムの実践など未知数な可能性を感じる場所。ホタルを核にしたまちづくりをさらに発展させていきたいと思います。